

理解力に問題のある 夫婦世帯への援助を考える

提出理由

身体に障害があり、ひらがな・カタカナしか読み書きのできない妻と、自分の名前を書くのがやっとで、判断能力に問題があると思われる夫が、互いに助け合って生活をしてきた。健康状態、日常の家事、経済的にも問題を抱えるなか、さまざまな支援を行ってきたが、そのプロセスを振り返るとともに、今後の支援の方向性について検討を行いたい。

事例提出者

Iさん（在宅介護支援センター、社会福祉士）

事例の概要

夫：86歳。現住所にて出生。男ばかりの兄弟の三男として成長したが、義務教育も満足に受けておらず、読み書きもできない。幼い頃から多少知的障害があったように思われる。

長く新聞配達の仕事をしてきたが、配達した家がわからなくなったり、集金ができなかったりしたこともあったようだ。

入院歴はないが、若い頃から低血圧気味で、貧血のような症状でよく倒れたらしい。

白内障、腰痛のため通院しているが、薬の管

理なども不十分で、少しよくなると1カ月以上通院しないこともある。ADLはほぼ自立。

妻：78歳。他県にて出生。生活のため、9歳で奉公に出され、両親やきょうだいとの思い出はあまりない。夫同様、義務教育も満足でなく、ひらがな・カタカナの読み書きができる程度。金銭の計算などはできる。

大人になってからは、旅館の下働きなど、職を転々とした。昭和30年頃、結婚。2女をもうける。働きの悪い夫に代わって、一家の生計を支え、2人の子どもを育てた。娘はともに成人し、嫁いでいる。あまり大きな病気をしたことはないが、20年前股関節炎を患い、60歳頃手術を受けたが、後遺症により歩行に障害が残った。現在はつかまり立ちが何とかできる程度。

運動不足から肥満が進行し、更に動けなくなるといった悪循環になっている。

収入は、夫婦ともに国民年金（老齢）受給。夫：24万円 妻：30万円。収入が少ないため、若いときに蓄えた預貯金を取り崩して生活してきた。

住居の状況（転居前まで）

室内は、雑然として不潔。トイレは汲み取り。風呂、流しは土間。トタンぶきで夏は暑い。同一敷地内に夫の弟が居住しているが、仲は



スーパーヴァイザー・奥川幸子氏を招いて開かれた事例検討会の模様を紹介し（検討会及び事例の内容は、誌面の都合及びプライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました）。

非常に悪い。

この住居のほか、2 kmほど離れた場所に、同じくらいの家を一軒所有しており、物置代わりに使用している。

援助の概要

第1段階 援助の方向性を見出すまでの時期
平成7年～11年まで

平成7年4月に、妻がデイサービスの利用を開始する。だが、医療的にも介護的にも日常生活的にも、多くの援助が必要であるにもかかわらず、経済的不安から最低限の援助しか受けない。水洗トイレの問題、ねずみの駆除の問題等々、次々に相談が寄せられ、一つひとつにヘルパーや薬局、民政委員、市社協、行政などと連携しながら対応してきた。

経済的不安については、生活保護の受給ができることは民政委員等からたびたび勧められてきたが、動こうとしなかった。しかしながら、経済の問題が不安の最も大きな要因となっていることがうかがえた。

第2段階 生活の立て直しに向けて援助の時期
平成11年12月

行政担当課に生活保護受給の可能性や障害要因を確認のうえ、妻と面接を行う。生活保護で

1カ月に受け取れる金額の概算、医療費（医療扶助）、介護用ベッドの導入などの具体的なイメージを伝えると、「嫌がらせを受けながら弟のそばで暮らすよりも、もう1軒の家に転居して生活保護を受けたい」と気持ちが変わってきた。別居している長女の賛成も確認できたので、新しく住む家の改修、修繕について事業所を紹介。行政に、住宅改修費補助の対象となることの確認を得る。

妻は、「生活保護をもらえれば、以前から（医師に）勧められていた白内障の手術が受けられる」と、先行きにも希望をもつようになる。頻回にかかってくる電話も、早く引っ越したいといった内容に変わってきた。

ボランティア組織等へ引越しの手伝いを依頼し、平成12年7月に引越しが実現した。
平成12年8月

引越し後、「通帳や印鑑がなくなった」と妻が興奮（後日すべて見つかる）。

興奮状態が続いたためか、視力の悪化が進行（眼底出血）。手術を急ぐようにドクターに勧められたのを機会に、権利擁護センターに金銭管理、証書預かりを依頼することとなる。この時、預金残高が1000万円を超えていることが判明（生活保護の可能性は消える）。

妻、眼科入院・手術（約1カ月）。

ヘルパー派遣（家事援助）により、何とか夫

の生活を支える。

転居を機に、緊急通報装置の取り付けを行う。また、第一家とは没交渉となり、生活への悪影響はなくなった。

第3段階 体調の変化と将来への準備

平成14年8月

夫は2~3カ月前より歩行が不安定となり、外出時には補助車を使用するようになっていたが、急に食事が摂れなくなり、胆石の疑いにて緊急入院。

妻の生活は、毎日1時間ずつ3回のヘルパー訪問で対応したが、不安感が強く、毎日何度も電話をかけてくる状態が続いた。

夫は、入院中指示が守れず、詳しい検査も行えないまま1週間ほどで退院となった。この頃より、眼科医の勧めもあり、妻の内科受診（高血圧症）をヘルパー付き添いにて確保。

11月

定期通院時、夫が胃がんであることがわかる。手術のため、入院する。

妻には夫の病名を知らせず、精神的安定をはかるため、ヘルパーの訪問時間を増やし、手術の日にはショートステイを利用した。

妻は老人ホームの生活に安心感を覚えたのか、入所を希望する。入所申込みを代行する。

帰宅後も妻の不安を考慮し、ヘルパーの訪問時間を長めに設定した。

12月

「今しか帰れないかもしれない。帰してあげたら……」と医師に勧められたと次女より相談。

「できれば父を退院させ、在宅生活を送らせてあげたい」とのこと。

現状を聞く限り、無理ではないと判断し、協力を約束する。その後、病院のMSWより、正式に協力依頼がある。

ヘルパーの調整（食事準備、服薬の確認等のため、1日4回の訪問）を行う。

平成15年1月

夫、予定通り退院。帰宅直後は食べるペースがつかめず、1回少量の嘔吐があったものの、その後は特変なく過ぎている。

ケース検討会

奥川 Iさんが今、一番引っかかっているところはどんな点ですか。

Iさん 2点あります。一つは、医療面についての配慮が足りなかったのではないかと、そのために妻の目の状態をみすみす悪くさせてしまっ

たのではないかと、という思いがあります。もう一つは、妻の力の見積もりが難しかった点です。今後、生活が大きく変化していくことが予想されますが、果たしてどのように妻の力を見積もり、支援していけばいいのか悩んでいます。

奥川 では、今Iさんがおっしゃった2点——医療面の配慮が足りなかったのかどうか、妻の力をどう見積って支援していけばいいか——を今日の課題にして検討を進めていきましょう。

Iさん よろしくお願ひします。

生活歴から

ソーシャルスキルを見積もる

奥川 では、まずこのクライアントとIさんがどのような状況に置かれていたのか、より詳しくアセスメントするための情報をIさんから引き出してみてください。

発言 二人の娘さんは、いつまでご一緒に暮らしていたのですか。

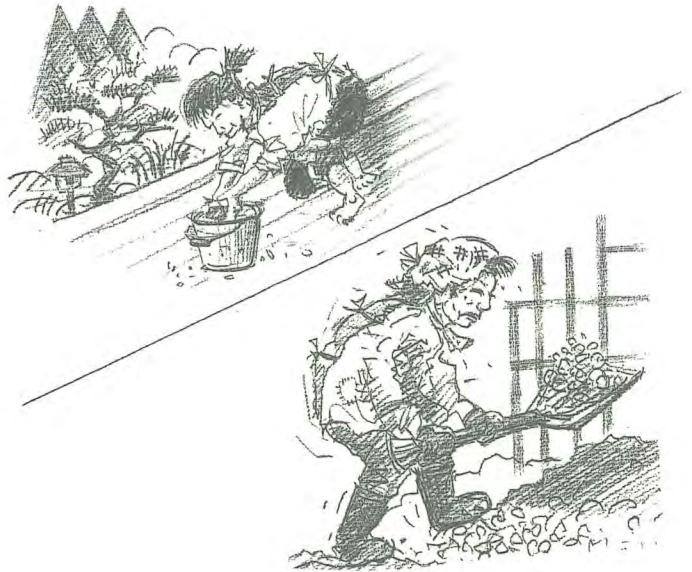
Iさん 正確には情報を押さえていませんが、妹さんのお子さんは小学校の高学年と聞いていますので、少なくともここ10年以上はご夫婦だけで暮らしていらっしゃるはずですよ。

発言 ご主人は新聞配達をしていたということですが、どのくらいの期間していたのですか。

Iさん 具体的には聞いていませんが、かなり長い間——数十年というレベルでやっていたようです。

発言 実質的には奥さんが生計を支えていたようですが、どんなお仕事をされていたのですか。

Iさん 具体的な職種は聞いていないのですが、建築関係の仕事だったようです。



発言 事務職ですか？

Iさん いえ、身体を動かす仕事だと思います。

奥川 もう少し遡った奥さんの生活歴について教えてください。旅館の下働きというのは、どんな仕事だったかわかりますか。

Iさん なんでも「花街にある旅館で飯炊きをしていた」とおっしゃっていました。

奥川 9歳から奉公に出されたということですが、ひらがな・カタカナはどこで覚えたのでしょうか。

Iさん 「小学校には少し行った」とおっしゃっていましたので、学校で習ったのではないのでしょうか。

奥川 漢字はまったく読めないのですか。

Iさん はい。ひらがなとカタカナだけです。

奥川 そうすると、新聞や雑誌、行政の広報などは読めませんか。

Iさん はい、まったく読めません。

奥川 言葉の認識についてはどうですか。ちょっと難しい言葉や抽象的な言葉など。

Iさん 日常的な会話のなかで不自由を感じたことはありませんが……。

奥川 子どもの頃の学習環境が整っていれば、漢字を覚えたり、理解力などももっと違っていたと思いますか。

Iさん そうですね——、新しいことを覚えられない方ではないので、クラスのトップに立つことはないにしても、後ろのほうでなら、なんとかついていくことはできたのではないかと思います。

奥川 なるほど。奥さんは仕事を転々としてきたということですが、どんな仕事をしてきたかわかりますか。

Iさん 具体的には聞いていません。

奥川 なぜ、この質問をしたかわかりますか？

Iさん 奥さんがどんなふうに生きてきたかを知るため——。

奥川 そうです。つまり、この方は自分の力で生活を切り開いてきた方なのか、それとも流されて生きてきたのかなのです。

Iさん 印象としては、流されてきたような感じを受けます。

奥川 人柄はどんな方ですか。

Iさん とても人なつこい方です。

奥川 周りが放っておかない、何らかのサポートをしてあげたくなるタイプですか。

Iさん そうですね。可愛がられるタイプだと思います。

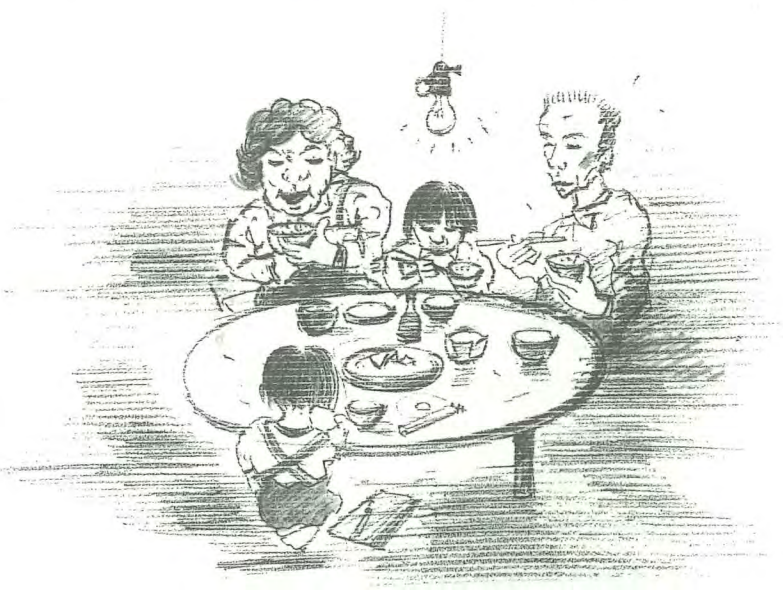
奥川 人なつこさや可愛がられるというもの、社会を生き抜く力、ソーシャルスキルの一つです。この方は、その力で生きてきたのかもしれないね。

サポーターは誰か

発言 娘さんたちの知的能力についてはいかがですか？

Iさん 問題ありません。お二人とも普通学校を卒業し、妹さんは高校も出ています。

発言 ご主人には多少知的障害があるというこ



とですが。

Iさん はい。自分の名前をようやく書ける程度です。

発言 これまでのお二人の暮らし方は、どういうスタイルだったのでしょうか。

Iさん 奥さんが意思決定をし、ご主人は言われたままに行動するというスタイルです。奥さんが「銀行に行って、いくらおろしてきて」と言えば、ご主人が通帳と印鑑をもって銀行に出かけていくというような。

発言 間違ったりすることはないのですか。

Iさん 時々通帳を忘れてきたりすることもあったようですが、まあなんとかなっていたようです。

奥川 こういふご夫婦が社会で生きていくのは大変なことです。どなたかサポートして下さる方はいらしたのですか。

Iさん はい。奥さんが働いていた職場の元上司の方が、ご夫婦で2人の生活をサポートしてくれていました。保険のことやいろいろな手続きなど、細々したことまで面倒を見てくれたようです。

奥川 インフォーマルなサポーターがいたわけですね。

発言 平成7年からお付き合いがあったわけですが、平成11年あたりから急速にIさんのかかわりが深くなっているように見えます。何か理由があったのでしょうか。

Iさん 実は、その職場の元上司が、ちょうどこの頃に身体をこわしてしまって、お二人にか

かわれなくなってしまったのです。

奥川 Iさんは、今おっしゃったようなことを意識してかかわっていましたか？

Iさん といえますと？

奥川 これまでインフォーマルなサポーターだった上司が倒れてしまった。そこで、在宅介護支援センターが次なるサポーターになったという位置づけが自分のなかでできていたかどうかです。

Iさん う〜ん、なんとなくはそう思っていた気はしますが……。

奥川 こういふ方たちを援助する場合、インフォーマルなサポーターがいなかったかどうか、その役割を今誰が担っているのかという視点は重要なポイントです。

Iさん はい、これからは明確に意識化するよう気をつけます。

妻の力を詳細に見積もる

奥川 では、援助経過に沿って見ていきましょう。第2段階のところで奥さんの気持ちに変化が訪れていますね。

Iさん はい。生活保護に関する情報をお伝える際、具体的に生活がどのように変わるのかを、なるべくわかりやすくお話ししたところ、転居と生保の受給について明確に意思表示されました。

奥川 援助職者による情報サポートですね。わかりやすく情報を伝えれば、奥さんは判断できる方だと思ってそうしたのですか。

Iさん それまでのやりとりから考えて、たぶん大丈夫だろうと思いました。

奥川 ちゃんと奥さんの力の見積もりをしているじゃないですか。

Iさん そうですね (笑)。

奥川 この方はひらがなとカタカナしか読めないという社会的不利はあるけれども、そこを援助者側がきちんと埋められれば、判断する力はある。そういうことを意識化して言葉にできるようになれば、他職種と協働してかかわる際にも明確にアセスメントを伝えられますし、役割分担もできるようになりますよね。

Iさん たしかに——。

奥川 だから、実践ではできているんです。

Iさん はい。意識化が課題ですね。

奥川 ほかに、第2段階についてはいかがでしょうか。

発言 奥さんの能力というテーマにからめてお聞きしたいのですが、引越しの時に通帳や印鑑がなくなってパニックになったようですが、これはどういう事情があったのでしょうか。

Iさん 結局は、いろいろなところ分散して入っていて、3カ月くらいかけて全部出てきました。奥さんはデイサービスにも通っていて貴重品の管理などもできる方なので、まかせておいても大丈夫かなと思っていたのですが、引越し当日はボランティアの方々が手伝ってくださって、わさわさしている間に事が進んでしまったようです。

奥川 なぜ、この場面でそれほど興奮したので

しょう。

Iさん 苦労して貯めてきた財産を失う恐怖だったのではないかと思います。

発言 1000万円という預金額は、この時点でわかったのですか。

Iさん そうです。それまでの5年間、額については一切話に出ませんでした。

奥川 虎の子の貯金ですからね。言わなくても不思議ではありませんし、ここで奥さんがパニックになるのも当然ですよ。

Iさん そう思います。まして自分では探しに行けない身体ですから。

奥川 そうすると、この奥さんは、日常的な身体に染み込んだ生活を送るぶんには問題はないけれども、少し複雑な要素が入ってくると対応が難しい方なのかもしれませんね。

Iさん そうですね。誰かが整理して、やることの順番を伝えれば大丈夫だと思いますが、一人で段取りを組むのは難しいですね。

奥川 それでも、「ヘルプ・ミー!」と言うことはできる。

Iさん はい。助けを求めるのは上手です。

奥川 ということは、「今は助けを求める場面だ」という判断を下す能力はあるということですね。

Iさん なるほど、そうやって緻密に捉えていくんですね——。

「先入観」か「評価」か

奥川 そして、この引越しの時に、Iさんが

引っかかっている医療の問題も起きるわけですね。

Iさん はい。奥さんの視力の低下が急に進みました。

奥川 本当にこの時の興奮状態が関係しているのですか？ ドクターに確認しましたか？

Iさん いえ、ハッキリとは確認していません。

奥川 ただ、Iさんとしては、もっと早く対応すればよかったと思っているんですね。

Iさん ええ。奥さんが目の手術を受ける気持ちになっているのを知ってから半年以上経っていましたので……。

奥川 この点については、皆さんどうお考えになりますか？

発言 平成11年12月に奥さんは「以前から手術を勧められていた」とおっしゃっていますが、なぜ手術を受けなかったのでしょうか。

Iさん やはり、お金がかかる、財産が減ってしまうと思っていたのではないのでしょうか。

発言 私もそう思いました。奥さんが手術を受ける気になったのは、Iさんが生活保護のイメージを具体的に伝え、医療扶助の仕組みを知ったからです。つまり、生保の話が出る前の時点では、自分の目の状態をよくするよりも、貯金が減ることの不安のほうが強かったのではないのでしょうか。

Iさん なるほど——。

奥川 そうですね。援助者側からすると、もっと早く手を打てなかったのかと思うわけですが、奥さんが感じている世界のリアリティに添って考えれば、こういう展開にならざるを得なかったでしょうね。Iさんは医療面に関して「先入観があった」とおっしゃっていましたが、実際問題として、このご夫婦にガチとした医療的な管理はできましたか？

Iさん やはり、相当のストレスになったと思います。

奥川 だとしたら、それは先入観ではないんじゃないですか？

Iさん 評価、でしょうか——。

奥川 そうですよ。これで医療に関する課題



はいいですか？

Iさん はい。

奥川 謙虚であることは援助職者にとって重要ですが、必要以上に反省することはありません。

Iさん はい（苦笑）。

今後の支援

奥川 では、第3段階について見ていきましょう。ご主人が入院し、奥さんは不安になってIさんのところに毎日電話をかけてくるようになりました。

Iさん これはしょうがないことだと思います。それまでずっと、ご主人がそばにいた生活だったわけですから。

奥川 電話では、どんなことをおっしゃるのですか？

Iさん とりあえず電話をかけてきて、それから用件を考えるような感じでした。何か一言返事をすれば、安心して切ります。毎日の安否確認の電話が向こうからかかってくるような感じというか——。

奥川 それは何を意味していると思いますか？

Iさん ——相談相手が、元の職場の上司から私になった。

奥川 そう。先ほどの話とつながりますよね。

Iさん たしかに——。

奥川 では、最後に今後の支援を考えていきましょう。今、奥さんからは施設入所の希望が出ています。入所はすぐにできる状況ですか？

Iさん いえ、かなりの期間待機しないといけ

ないと思います。

奥川 そうすると、入所までの間をどうしのぐかが大きな課題ですね。

Iさん はい。

奥川 では、これからIさんがしなければいけないことは何ですか？

Iさん まず、奥さんが入所を希望しているのは、どんな気持ちからなののかをつかむことだと思います。

奥川 そうですね。それから？

Iさん ご主人の状態を把握して、どこまでお二人で一緒に暮らしていくかを、奥さんと一緒に考えていきます。

奥川 そう。生活保護の話と奥さんがイメージしやすいようにお話した時と同じようにすればいいですね。

Iさん はい。

奥川 いかがでしょう。今日の課題はだいたい解けたんじゃないですか？

Iさん はい。奥さんは、こちらが具体的に話をしていけば、ご自分で判断して対処できる力をもっていらっしゃいます。施設にもなじめそうなので、将来入所をすることになっても大丈夫だと思います。

奥川 施設になじめるというのも、この方のソーシャルスキル、生活力です。何しろ、9歳から他人のなかで揉まれて生き抜いてきた方ですからね。とても強い方です。

Iさん 本当にそう思います。今日は、ありがとうございました。